

トイウ補語節と *wâa* 補語節

—発話動詞起源の名詞補語節標識の日タイ対照—

高橋清子

【要旨】日タイの発話動詞起源の名詞補語節標識—トイウと *wâa*—について、コーパス使用例（「[補語節, トイウ]名詞」、「名詞[*wâa*, 補語節]」）をもとに、その使われ方を考察した。日本語の裸の補語節とトイウ補語節、タイ語の *thii* 補語節と *wâa* 補語節、それぞれに認識モダリティ (*de re / de dicto*) が関わる使い分けがある。日本語の裸の補語節は *de re* 領域（現実世界の事実内容）を表し（[雷に当たった]事件）、タイ語の *wâa* 補語節は *de dicto* 領域（観念世界の断定内容）を表す（*kham tǒɔp [wâa ʔaayúʔ rǒɔj pii]* ‘百歳だという答え’）。日本語では *de dicto* 領域の内容（内容補充修飾）にはトイウ補語節を使い（[百歳だトイウ]答え）、タイ語では *de re* 領域の内容（内容補充/逆補充修飾）には *thii* 補語節を使う（*hèet kaan [thii thùuk fáa phǎa]* ‘雷に当たった事件’）。語用論的な使い分けが関与するのは、日本語では裸の補語節とトイウ補語節のどちらも使える *de re* 領域、タイ語では *thii* 補語節と *wâa* 補語節のどちらも使える *de dicto* 領域である。

【キーワード】発話動詞、名詞補語節標識、*de re / de dicto*、日本語、タイ語

1. はじめに

本稿の目的は、コーパスを使って日本語とタイ語の一对の名詞補語節標識 *noun complementizer*¹—トイウと *wâa*—を含む補語節（以下、「トイウ補語節」、「*wâa* 補語節」と呼ぶ）の使用実態を探り、それぞれの使用条件を対比的に考察することである。具体的には、「*hèet phǎn*²/理由」を被修飾名詞とする構文に焦点を当てたコーパス分析の結果を詳述し（第2節）、英語の名詞補語節標識の分類を参照し

ながら (第 3 節)、トイウと *wāa* の特徴を考察する。トイウと *wāa* は共に発話動詞起源の名詞補語節標識であるが、その使われ方にはどのような異同があるのかを明らかにしたい。

タイ語の名詞修飾節³は、Kullavanijaya (2008: 448) によれば、関係節 *relative clause* と名詞補語節 *noun complement (clause)* に二分できる。いずれも被修飾名詞を主要部とする広い意味での従属節である。関係節内の動詞と被修飾名詞との間には主語、目的語、斜格語といった文法関係が認められる (e.g. *ruʔaŋ [thīi phɔʔ dâj yin* {話 [COMP 父 聞く]}] 「父が聞いた話」)。一方、名詞補語節内の動詞と被修飾名詞との間にはそのような文法関係が認められない (e.g. *ruʔaŋ [thīi phɔʔ kàp méʔ thalɔʔ kan bɔʔj* {事実 [COMP 父 ~と 母 口論する RECP 頻繁に]} 「父と母が頻繁に口論をする事実」)。関係節は標識 (e.g. *thīi*) を伴ったり伴わなかったりするが、名詞補語節は通常、標識を伴う。

日本語の名詞修飾節は単純に関係節と名詞補語節に二分できない (松本 2014, Matsumoto and Comrie 2018)。「[頭 {が/の} 良くなる]本」のような短絡タイプや「[逮捕される]前日」のような相対性名詞を修飾するタイプなど (寺村 1992: 256, 287–296)、関係節にも名詞補語節にも分類し難いタイプが存在するからである。典型的には裸の節と被修飾名詞が何も標識を介さずに隣り合って並ぶ。しかしトイウが介在することがある。トイウの他、トノ、トイッタ、ツテイウなどが使われることもあり、それぞれ機能に差があるが、本稿ではトイウ補語節と裸の補語節に考察対象を限る。トイウは助詞「と」と発話動詞「言う」から成る形式「と言う」が名詞補語節標識になったものである。発話/思考に関連する名詞の補語節に使うことが多いが、その他の名詞にも使用され得る。トイウの使用条件に関する論考は多く、様々な主張がなされている (e.g. Maynard 1992; 大島 2010: 140–162; Takahashi 1997; 寺村 1992: 266–276; 日本語記述文法研究会 2008: 45, 65–66; 益岡 1997: 35, 43; 益岡 2002: 93–116)⁴。多くの論考に共通する見解は以下の通りである。(修飾節内の動詞と被修飾名詞との間に文法関係が認められない) 補語節の場合、発話を引用したり主観的/間主観的意味を表す形式 (e.g. ~シヨウ、~ダ、

～シロ、～スルナ、～シマス、～ネ、主題を表すハ) を含んだりするときにはトイウを使わなければならない (e.g. [日本に行こうトイウ]誘い)。本来的に相対的な意味を持つ相対性の名詞 (e.g. 上、帰り) と感覚タイプの名詞 (e.g. 匂い、姿) はトイウ補語節を取れず裸の補語節を取る。前者は逆補充の修飾 (相対概念の修飾) となり (e.g. [日本に行った]翌日)、後者は普通の内容補充の修飾となる (e.g. [扉を閉める]音)。(修飾節内の動詞と被修飾名詞との間に文法関係が認められる) 関係節の場合、トイウを使うことによって伝聞の意味や話者の評価/主観的態度の意味が表されたり強調や焦点化といったある種の伝達機能が加わったりする (e.g. [いつも遅刻する]学生 vs. [いつも遅刻するトイウ]学生)。

タイ語の先行研究では、動詞補語節標識の *hâj* (< *hâj* ‘transfer, give’; 願望/意志的活動を表す動詞の補語節を導く)、*thîi* (< *thîi* ‘NOMINALIZER’ < *thîi* ‘place’; 情動を表す動詞の補語節を導く)、*wâa* (< *wâa* ‘say’; 知覚/認識/発話を表す動詞の補語節を導く)、*sûŋ* (現代タイ語では硬い文語体にしか使われない) や関係節/名詞補語節標識の *thîi*、*sûŋ* が取り上げられそれぞれの特徴が分析されてきた (e.g. Kullavanijaya 2008; Matisoff 1991: 398–399, 437; Prasithratsint 2009; Ransom 1986: 49, 101, 138; Sornhiran 1978; 高橋 2011; Yaowapat 2008: 8–10, 59–75, 127–150, 182–224)。*wâa* は既存の研究では動詞補語節標識として扱われているものの、実際には名詞補語節標識 (e.g. (1)⁵) として使用されることも多い。補語節標識 *wâa* の起源は発話動詞 *wâa* である。現代タイ語において *wâa* は動詞補語節標識 (e.g. (2)) としての使用頻度が高いが、発話動詞 (e.g. (3)) としても「言う、文句を言う、咎める、述べる」といった意味で日常的によく使われる。

- (1) *khwaam ciŋ* [*wâa* *khon* *mák* *càʔ* *dan thuraŋ*
 truth COMP people be.pron.e.to IRR be.stubborn
thâa hàak *thùuk tham* *hâj* *sîa nâa*]
 if PASS do IRR.COMP lose.face

「面目を潰されれば人は頑固になるものであるという真実」

(2) *kháw phûut wâa yan ηaj*

PRON say COMP how

「彼はどう言ったか。」

(3) *kháw wâa yan ηaj*

PRON say how

「彼はどう言ったか。」

日タイの発話動詞起源の名詞補語節標識—トイウと *wâa*—は、発話/思考の名詞と親和性が高いが、他の名詞にも使えること、そしてその使用条件が複雑であることが共通する。しかし名詞補語節の体系自体は日タイで異なる。日本語の名詞補語節は標識を使わないのが基本であり、何らかの意味論的/語用論的理由で標識が必要なときにトイウを使う。一方、タイ語の名詞補語節は基本的に標識を使い、*thîi* (e.g. (4)) の使用が圧倒的に多いが、*wâa* (e.g. (1)) や複合形の *thîi wâa* (e.g. (5)) も使われている⁶。*súη* (e.g. (6)) は文語的である。名詞補語節標識 *súη* の用例を挙げている先行研究はあるが (Sornhiran 1978: 119–120; Yaowapat 2008: 74–75, 128)、現代タイ語では使用頻度が低い。本稿では *wâa* 補語節と *thîi* 補語節に考察対象を限る。

(4) *khwaam ciη [thîi kháw yan mây rúu càk*

truth COMP PRON yet NEG be.acquainted.with

thəə dii phəə]

PRON be.good be.enough

「彼が彼女をまだよく知らないという真実」

(5) *khwaam ciη [thîi wâa méε rák phǒm mâak]*

truth COMP motherlove PRON be.plentiful

「母が僕をととても愛しているという真実」

(6) *phǒn bun [súη khâaphacâw dâj thawăaj pháттаahăan*

merit COMP PRON REAL present food

kéε phráz sǒη]

to monk

「私が僧侶に食物を施した功德」

その他、日タイの名詞補語節には以下のような違いもある（これらの違いについては 2.3 節で再び取り上げる）。日本語では、「事件」などの「コト」タイプの名詞は裸の補語節もトイウ補語節も取ることができる（e.g. 作例(7)）。「感触」などの「感覚」タイプの名詞は裸の補語節しか取れず（e.g. 作例(8)）、「答え」などの「発話」タイプの名詞はトイウ補語節しか取れない（e.g. 作例(9)）。タイ語では（cf. 高橋 2019）、*hèet kaan* ‘事件’ と *sǎmphàt* ‘感触’ は *wáa* 補語節を取ることができず *thîi* 補語節しか取れない（e.g. (10)(11)）。*kham tǎɔp* ‘答え’ は *wáa* 補語節も *thîi wáa* 補語節も取る（e.g. (12)）。

(7) [雷に当たった（トイウ）]事件

(8) [足の裏が床にぶつかる]感触

(9) [年齢は百歳を超えているトイウ]答え

(10) *hèet kaan* [*thîi* *thùuk fàa phàa*]
event COMP hit thunderbolt

「雷に当たった事件」

(11) *sǎmphàt* [*thîi* *fàa tháaw* *krathóp* *phúun*]
the.touch COMP sole touch floor

「足の裏が床にぶつかる感触」

(12) *kham tǎɔp* [*(thîi) wáa* *ʔaayúʔrǎɔj* *kwàa pii* *l'éɛw*]
answer COMP age 100 over year PFV

「年齢は百歳を超えているという答え」

タイ語の名詞補語節に関する予備調査（高橋 2019）⁷を実施したとき、*wáa* 補語節を多く取り *thîi* 補語節もかなり多く取る名詞があることに気付いた。それは *hèet phǎn* ‘理由’ である。*hèet phǎn* に対応する日本語の「理由」は、他の多くの名詞と同様、裸の補語節を取ることが多いが、トイウ補語節を取ることも多い⁸。日本語の「理由」が裸の補語節とトイウ補語節の両方を取るように、タイ語の *hèet phǎn* も *thîi* 補語節と *wáa* 補語節の両方を取るのである。本稿では、

① 補語節、② 名詞補語節標識「トイウ/*wâa*」、③ 被修飾名詞「理由/*hèet phǒn*」の 3 者を含む名詞句—日本語の「[補語節,トイウ]理由」とタイ語の「*hèet phǒn [wâa,補語節]*」—に焦点を当てて考察を行う。分析データはインターネット上に公開されている日本語およびタイ語の大規模電子コーパス—現代日本語書き言葉均衡コーパス **Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese** の少納言 KOTONOHA (BCCWJ コーパス) <<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>> (2018 年 9 月 4 日検索)とタイ・ナショナルコーパス **Thai National Corpus**(TNC コーパス) <<http://www.arts.chula.ac.th/~ling/tnc3/>> (2018 年 4 月 25 日検索)—から収集した。

2. コーパス分析

2.1 日本語名詞句：[補語節,トイウ]被修飾名詞

BCCWJ コーパスを使って連語形式「という理由」を検索したところ、993 件の用例があることが分かった。500 件の用例が無作為抽出された。タイ語で TNC コーパスを使って収集することができた分析データの用例数 (90 件) に合わせるため、便宜的に、本稿の分析データとなる形式「[補語節,トイウ]理由」に適合していた 1 件目から 90 件目までの 90 件の用例を分析データとして採用した。

90 件の用例に含まれていた名詞句「[補語節,トイウ]理由」を文法機能別に分類すると、①斜格後置詞 (e.g. で、から、の、に) の項名詞句が 60 件 (約 66.6%)、②形容詞/動詞述語 (e.g. ない、ある、挙げる、伝える、説明する、発見する) の項名詞句が 16 件 (約 17.7%)、③いわゆる名詞述語 (e.g. 名詞句+だ/である/ではない) の構成素が 9 件 (10%)、④独立名詞句が 5 件 (約 5.5%) だった。複数見つかった慣用句的な連語形式を挙げると、「～という理由 (だけ) で」が 44 件、「～という理由は (何も) ない」が 3 件あった。

意味的には、(13)(14)のような「理由」の内容を補充する修飾 (以下、「内容補充修飾」と呼ぶ) (80 件) と(15)(16)のような「理由」の相対概念である「帰結」の内容を補充する修飾 (以下、「逆補充修飾」と呼ぶ) (10 件) に分類できた。(13)では「なぜなら前例がな

いからだ」、(14)では「なぜなら嫌だからだ」という理由の内容が補語節によって表現されている。(15)では「ある理由で(知識が)多くてはいけない」、(16)では「ある理由で、ポリアセチレンが理想的には金属になる」という帰結の内容が補語節によって表現されている。

(13) ただし、[前例がないトイウ]理由で、新企画のすべてが却下されているわけではありません。(内容補充)

(14) 震え、鳥肌が立つのは、[嫌だからトイウ]理由だけではない。(内容補充)

(15) 知識はいくら多く蓄えてもいい。[多くてはいけないトイウ]理由は何もない。(逆補充)

(16) これが[ポリアセチレンが理想的には金属になるトイウ]理由である。(逆補充)

内容補充修飾の用例(13)(14)のトイウは省くことができない(e.g. (17)(18); (14)「嫌だから」は自然な形で被修飾名詞に続くよう便宜的に(18)「嫌だからである」に変えた)。一方、逆補充修飾の用例(15)(16)はトイウを省いて裸の補語節に変えてしまっても、元の逆補充修飾の意味に解釈することができる(e.g. 作例(19)(20))。ただし(20)の場合、「理想的には」という助詞「は」を含む副詞句が入るとトイウ補語節(16)のほうがより自然な表現になる。いずれにせよ、逆補充修飾は裸の補語節によってもトイウ補語節によっても可能であることが分かる。

(17) ただし、*[前例がない]理由で、新企画のすべてが却下されているわけではありません。(意図する意味：内容補充)

(18) 震え、鳥肌が立つのは、*[嫌だからである]理由だけではない。(意図する意味：内容補充)

(19) 知識はいくら多く蓄えてもいい。[多くてはいけない]理由は何もない。(逆補充)

(20) これが[ポリアセチレンが(理想的には)金属になる]理由であ

る。(逆補充)

被修飾名詞が「理由」でなく「事件」などの他の名詞であれば裸の補語節でもトイウ補語節でも内容補充修飾が可能である(作例(21)(22))。「事件」の裸の補語節(21)とトイウ補語節(22)を比べると、前者は無標の修飾であるのに対し、後者は語用論的に有標であるように感じられる。このことは「理由」の逆補充修飾にも当てはまる。裸の補語節(19)(20)は無標の修飾であり、トイウ補語節(15)(16)は有標の修飾であるように感じられる。

(21) [雷に当たった]事件 (内容補充)

(22) [雷に当たったトイウ]事件 (内容補充)

内容補充修飾の用例には、(23)のように疑問詞を含む例や(24)のように直接引用に近い例が含まれていた。逆補充修飾の用例には疑問詞を含む例や直接引用の例はなかった。疑問詞を含む場合は内容補充修飾の解釈となり、トイウが必要となる(e.g. 作例(25))。

(23) 私はある日、[このエレベーターがなにゆえに存在するかトイウ]理由を発見して、愕然としたのである。(内容補充)

(24) [「パソコンはどれも苦手」トイウ]理由で冷却 CCD カメラを敬遠する人も多いようだが(内容補充)

(25) [なぜ(知識が)多くてはいけないかトイウ]理由(内容補充)

2.2 タイ語名詞句：被修飾名詞[wâa,補語節]

予備調査で TNC コーパスを使って集めた名詞補語節の用例の中に含まれていた「*hèet phǒn* [wâa,補語節]」という形式の名詞句(90件)を本稿の分析データとした。

90件の用例に含まれていた名詞句「*hèet phǒn* [wâa,補語節]」の統語位置(文法機能)を調べたところ、①動詞(e.g. *hâj* ‘与える’, *ʔáaŋ* ‘言及する’, *ʔathibaaj* ‘説明する’, *hěn* ‘理解する’, *mii* ‘存在する’)あるいは繫辞の後ろ(動詞/繫辞の項名詞句)が69件(約77%)、②

前置詞 (e.g. *dúaj* ‘(理由)で’, *phróʔ* ‘(理由)により’) の後ろ (前置詞の項名詞句) が 17 件 (約 19%)、③節はじめの独立した位置 (主題名詞句など) が 4 件 (約 4%) だった。動詞の前に生起している項名詞句としての例はなかった。目立って多かった慣用句的な連語形式として、「*háj hèet phǒn wáa*~ ‘~という理由を挙げる’」(39 件) と「*duáj hèet phǒn wáa*~ ‘~という理由で’」(16 件) が挙げられる。

意味的には全てが内容補充修飾 (e.g. (26)(27)) だった。逆補充修飾に解釈できる用例はなかった。(26)では「なぜなら人混みがうっとうしいからだ」、(27)では「なぜなら楽しげな近道学習法だからだ」という理由の内容が *wáa* 補語節で表現されている。

(26) *dú ay hèet phǒn [wáa ramkhaan khon yáʔ yáʔ]*
with reason COMP feel.annoyed people be.plentiful
「人混みがうっとうしいという理由で」(内容補充)

(27) *dú ay hèet phǒn [wáa pen withii rian]*
with reason COMP COP learning.method
lát thii náa sanùk]
take.a.shortcut REL be.joyful
「楽しげな近道学習法だという理由で」(内容補充)

ここで *wáa* を *thii* あるいは *thii wáa* に換えても同じ内容補充修飾の解釈が可能であるということに言及しておきたい (作例 (28))。 (26) の *wáa* 補語節と (28) の *thii* 補語節 / *thii wáa* 補語節の使い分けについては詳しい調査が必要である。

(28) *dú ay hèet phǒn [thii (wáa) ramkhaan khon]*
with reason COMP feel.annoyed people
yáʔ yáʔ]
be.plentiful
「人混みがうっとうしいという理由で」(内容補充)

wáa 補語節の用例には (29) のように疑問詞を含む例や (30) のよう

に主観的/間主観的な意味を表す終結小辞 *náʔ* ‘PRT’を含んだ直接引用に近い例もあった。ただし(30)は慣用句的な連語形式 *háj hêt phõn wâa*~‘~という理由を与える/挙げる’に含まれていた名詞句である。(31)のように *háj hêt phõn* ‘理由を与える’を「説明する」という固有の意味を持つ複合動詞と見なすのであれば、*wâa* は動詞補語節標識として解釈されることになる (高橋 2019, §4)。

(29) *nî i khuu hêt phõn [wâa thammaj phõm cuŋ*
 this COP reason COMP why PRON then
tàt sîn caj wan nîi]
 decide today

「これがなぜ僕が今日決心するのかの理由だ。」(内容補充)

(30) *háj hêt phõn [wâa nʔɔŋ phii*
 give reason COMP younger.sibling (proper.name)
mii ʔawajyawáʔ phêet chaaj yùu nâʔ?
 exist genital.organ male CONT PRT
cuŋ mâj dâj pen tút]
 then NEG.REAL COP transvestite

「ピーには男性性器があるんだよ、だからオカマじゃないという理由を挙げた。」(内容補充)

(31) *háj hêt phõn wâa nʔɔŋ phii mii*
 explain COMP younger.sibling (proper.name) exist
ʔawajyawáʔ phêet chaaj yùu náʔ
 genital.organ male CONT PRT
cuŋ mâj dâj pen tút
 then NEG.REAL COP transvestite

「ピーには男性性器があるんだよ、だからオカマじゃないと説明した。」(動詞補語)

thîi 補語節による逆補充修飾 (e.g. (32)(33)) では (不定用法の疑問詞を除いて) 疑問詞を含むことはなく、直接引用の内容を表すこともない。*thîi* 補語節を従えた *hêt phõn* ‘理由’ (32)(33)は観念的な

相対性の名詞（「帰結」に対する「理由」）として扱われ逆補充修飾がなされている。(32)では「ある理由により変装しなければならない」、(33)では「ある理由によりお忍びで行く」という帰結の内容が *thîi* 補語節によって表現されている。

(32) *hancinwɔɔn lâw hêt phôn [thîi tɔŋ plɔɔm*
 (proper.name) tell reason COMP must counterfeit
tua] hâj chán faŋ
 body IRR.COMP PRON listen

「ハンジンウォーンは変装しなければならない理由を私に語って聞かせた。」(逆補充)

(33) *mâj nâa càʔ mii hêt phôn [thîi paj*
 NEG be.likely IRR exist reason COMP go
yùu yàaŋ láp láp]
 stay secretly

「お忍びで行く理由はなさそうだ。」(逆補充)

2.3 コーパス分析のまとめ

コーパス分析の結果、日本語においてもタイ語においても、被修飾名詞「理由/*hêt phôn*」は観念的な相対性タイプの名詞（「帰結」に対する「理由」）として扱われ逆補充修飾がなされることもあれば、コト名詞として扱われ内容補充修飾がなされることもある、ということが分かった。

表 1 に日タイの名詞補語節の対照をまとめる。日本語では、「答え」はトイウ補語節によって内容補充修飾となる (e.g. (9))。「理由」の内容補充修飾にはトイウ補語節が使われ観念世界の原因事象（理由の内容）が表される (e.g. (13)(14)(23)–(25))。「理由」の逆補充修飾には裸の補語節あるいはトイウ補語節が使われ現実世界の結果事象（理由の相対概念である帰結の内容）が表される (e.g. (15)(16)(19)(20))。「事件」はトイウ補語節によっても裸の補語節によっても内容補充修飾となる (e.g. (21)(22))。「感触」は裸の補語節によって内容補充修飾となる (e.g. (8))。裸の補語節とトイウ補語

節の両方を使える「理由」の逆補充修飾や「事件」の内容補充修飾では、裸の補語節のほうが意味的に無標な修飾となる。タイ語では、*kham tɔɔp* ‘答え’は *waa* 補語節あるいは *thii waa* 補語節によって内容補充修飾となる (e.g. (12))。 *hèet phǒn* ‘理由’の内容補充修飾には *waa* 補語節あるいは *thii* 補語節が使われ観念世界の原因事象 (理由の内容) が表される (e.g. (26)–(30))。 *hèet phǒn* ‘理由’の逆補充修飾には *thii* 補語節が使われ現実世界の結果事象 (理由の相対概念である帰結の内容) が表される (e.g. (32)(33))。 *hèet kaan* ‘事件’と *sāmphàt* ‘感触’は *thii* 補語節によって内容補充修飾となる (e.g. (10)(11))。

表 1：日タイの名詞補語節

	日本語		タイ語	
	裸の補語節	トイウ補語節	<i>thii</i> 補語節	<i>waa</i> 補語節
発話名詞「答え」 <i>kham tɔɔp</i> 内容補充修飾		√	√ <i>thii waa</i>	√
コト名詞「理由」 <i>hèet phǒn</i> 内容補充修飾		√	√	√
観念的相対性名詞「理由」(←→帰結) 逆補充修飾	√	√	√	
コト名詞「事件」 <i>hèet kaan</i> 内容補充修飾	√	√	√	
感覚名詞「感触」 <i>sāmphàt</i> 内容補充修飾	√		√	

補語節の種類別にまとめると、次の通りである。日本語のトイウ補語節は、発話名詞「答え」の内容補充修飾とコト名詞「理由」の内容補充修飾に必ず使われ、観念的相対性名詞「理由」の逆補充修飾とコト名詞「事件」の内容補充修飾にも使われる。日本語の裸の補語節は、感覚名詞「感触」の内容補充修飾に必ず使われ、観念的相対性名詞「理由」の逆補充修飾とコト名詞「事件」の内容補充修飾にも使われる。タイ語の *waa* 補語節は、発話名詞 *kham tɔɔp* ‘答え’の内容補充修飾とコト名詞 *hèet phǒn* ‘理由’の内容補充修飾に使われる。タイ語の *thii* 補語節は、発話名詞 *kham tɔɔp* ‘答え’の内容補充修飾 (この場合は *thii waa* 補語節となる)、コト名詞 *hèet phǒn* ‘理

由’の内容補充修飾、観念的相対性名詞 *hèet phôn* ‘理由’の逆補充修飾、コト名詞 *hèet kaan* ‘事件’の内容補充修飾、感覚名詞 *sămphàt* ‘感觸’の内容補充修飾に使われる。

3. 考察

タイ語の名詞補語節標識 *thîi* と *wâa* の使い分けは英語の名詞補語節標識 gerundive *-ing* / infinitival *to* と definite *that* の使い分けに似たところがある。本節では、英語の名詞補語節に関する先行研究を参照しながら、日タイの補語節に関係する要素を検討していきたい。

Noonan (2007: 147–149) は英語の名詞補語節を動詞補語節と同じ次の 3 タイプに分類する。(a)不定形 infinitive タイプ (e.g. Walt’s ability [to chew gum and tie shoes at the same time])、(b)叙実法 indicative タイプ (e.g. Andrea’s belief [that Max is the King of Greenland])、(c)叙想法 subjunctive タイプ (e.g. Queen Zelda’s command [that Zeke be shot])。この分類を日タイの名詞補語節に当てはめると (cf.表 3)、日本語では、裸の補語節は(a)不定形タイプ ([ガムを噛みながら靴ひもを結ぶ]能力) に使用可能で、トイウ補語節は(a)不定形タイプ (任意: [ガムを噛みながら靴ひもを結ぶトイウ]能力)、(b)叙実法タイプ (必須: [彼がグリーンランドの王であるトイウ]信念)、(c)叙想法タイプ (必須: [彼は撃たれようトイウ]命令、[彼を撃てトイウ]命令) の全てに使用可能である。タイ語では、*thîi* 補語節 (あるいは *thîi wâa* 補語節) は (a)非定形タイプ (*khwaam sāmāat* [thîi wâa *khîaw màak faràŋ léʔ phùuk chúak rɔɔŋ tháaw phrɔ́ɔm kan dáj*] ([ガムを噛んで同時に靴ひもを結べる] 能力))⁹、(b)叙実法タイプ (*khwaam chúa* [thîi wâa *kháw pen phráʔraachaa hèn kriin leen*] ([彼がグリーンランドの王であるという] 信念))、(c)叙想法タイプ (*kham sàŋ* [thîi càʔ hâj kháw thùuk yìŋ taaj] ([彼は撃たれて殺されようという] 命令)) の全てに使用可能で、*wâa* 補語節は (b)叙実法タイプ (*khwaam chúa* [wâa *kháw pen phráʔraachaa hèn kriin leen*] ([彼がグリーンランドの王であるという] 信念)) と (c)叙想法タイプ (*kham sàŋ* [wâa *càʔ hâj kháw thùuk yìŋ taaj*] ([彼は撃たれて殺されようという] 命令)) に使用可能である。

Frajzyngier(1991: 220) および Frajzyngier and Jasperson(1991: 135) は、認識モダリティ epistemic modality の下位分類として、現実世界に関する「de re 領域」(e.g. 英語の *-ing* 節や *to* 節が表す事実的 *factive* な内容; cf. (34)(36)) と発話の中で話者によって系統立てられた観念世界に関する「de dicto 領域」(e.g. 英語の *that* 節が表す断定 *assertion* の内容; cf. (35)(37)) を分ける¹⁰。

(34) He wants to eat apples. (Frajzyngier and Jasperson 1991: 139)

(35) He said that he likes apples. (Frajzyngier and Jasperson 1991: 139)

(36) I saw him sleeping. (Frajzyngier 1991: 226)

(37) I saw that he was sleeping. (Frajzyngier 1991: 226)

通言語的に、de re 領域の補語節は直接知覚 *direct perception* や目的 *purpose* などの内容を表し、de dicto 領域の補語節は伝聞 *hearsay* を含む間接証拠性 *indirect evidence* の内容を表す (Frajzyngier 1995: 481, 485, 490)。

この分類に従えば、タイ語の *wāa* 補語節は de dicto 領域の補語節である。de re 領域の補語節ではない。言い換えれば、*wāa* 補語節は「発話の中で話者によって系統立てられた観念世界の内容、つまり話者の断定が関与する観念内容」を表すのであって、「現実世界の内容、つまり話者の断定が関与しない事実内容」を表すのではない。日本語の名詞補語節に関する先行研究において「事件」と「理由」が同じタイプの名詞に分類されることがあるが (e.g. 日本語記述文法研究会 2008: 69)、両者は異なるタイプに分類されるべきだと筆者は考える。筆者の考えでは、「事件」は「感触」と同じ de re 事象タイプであり、「理由」は「答え」と同じ de dicto 事象タイプである。「事件」や「感触」は de re 領域 (現実世界の事実内容) の意味を持つが、「理由」や「答え」は de dicto 領域 (観念世界の断定内容) の意味を持つ。参考として、表 2 に de re 事象タイプと de dicto 事象タイプの名詞の例を挙げる。

表 2 : de re 事象名詞と de dicto 事象名詞の例

de re 事象名詞 (現実世界の事実内容を表す)	de dicto 事象名詞 (観念世界の断定内容を表す)
感覚名詞「感触」、 現実的コト名詞「事件」、「能力」、 「帰結」	発話名詞「答え」、 観念的コト名詞「信念」、「命令」、 「理由」

タイ語では、de re 領域に属する *hèet kaan* ‘事件’や *sámphát* ‘感触’は *thîi* 補語節を取り、de dicto 領域に属する *hèet phôn* ‘理由’や *kham tǎɔp* ‘答え’は *wāa* 補語節を取る。ただし *thîi* 補語節は de re 領域専門の補語節というわけではなく、領域を問わずに使える汎用性の高い補語節である。したがって *hèet phôn* ‘理由’や *kham tǎɔp* ‘答え’が *thîi* 補語節によって内容補充修飾を受けることもある。また、*hèet phôn* ‘理由’は観念的相対性名詞（「帰結」に対する「理由」）として使用され逆補充修飾を受けることもあり、その場合は de re 領域の補語節である *thîi* 補語節を取る。逆補充修飾の内容（帰結の内容）は物理的世界に生起し客観的に捉えられる具象的な出来事であり、そのような出来事は de re 領域に属するからである。de dicto 領域に特化した *wāa* 補語節はそのような de re 領域の内容を持つ逆補充修飾には使えない。*hèet phôn* ‘理由’の逆補充修飾は専ら *thîi* 補語節で表されることになる。

日本語では、de re 領域に属する「感触」は裸の補語節しか取り得ず、de dicto 領域に属する「答え」はトイウ補語節しか取り得ない。しかし de re 領域に属する「事件」と de dicto 領域に属する「理由」は裸の補語節とトイウ補語節の両方を取り得る。ただし「理由」が裸の補語節を取るときは必ず逆補充修飾である。

日タイ共に、名詞補語節の異なる形式の使い分けには「de re 領域」対「de dicto 領域」という認識モダリティの区分が何らかの形で関与しているようである。日本語の裸の補語節とトイウ補語節の使い分けとタイ語の *wāa* 補語節と *thîi* 補語節の使い分けは、どのような点が同じでどのような点が異なるのだろうか。

表 3: 英日タイの名詞補語節

	英語	日本語		タイ語	
		裸の補語節	トイウ補語節	<i>thîi</i> 補語節	<i>wāa</i> 補語節
de re 領域	de re 事象を表す不定形 <i>-ing/to</i> 補語節 e.g. ~する能力	de re 事象名詞 「感触」 「事件」 「能力」 〈内容補充〉 相対性名詞 「理由」(←→帰結) 〈逆補充〉	de re 事象名詞 「事件」 「能力」 〈内容補充〉 相対性名詞 「理由」(←→帰結) 〈逆補充〉	de re 事象名詞 「感触」 「事件」 「能力 (<i>thîi wāa</i>)」 〈内容補充〉 相対性名詞 「理由」(←→帰結) 〈逆補充〉	
de dicto 領域	de dicto 事象を表す叙実法 <i>that</i> 補語節 e.g. ~だという信念 de dicto 事象を表す叙想法 <i>that</i> 補語節 e.g. ~となるうという命令		de dicto 事象名詞 「理由」 「答え」 「信念」 「命令」 〈内容補充〉	de dicto 事象名詞 「理由」 「答え (<i>thîi wāa</i>)」 「信念 (<i>thîi wāa</i>)」 「命令」 〈内容補充〉	de dicto 事象名詞 「理由」 「答え」 「信念」 「命令」 〈内容補充〉

英日タイの名詞補語節の対照をまとめた表 3 から以下のことが読みとれる。日本語の裸の補語節は必ず de re 領域の内容（英語の不定形 *-ing/to* 補語節が表す現実世界の実内容）を表し、タイ語の *wāa* 補語節は必ず de dicto 領域の内容（英語の叙実法/叙想法 *that* 補語節が表す観念世界の断定内容）を表す。日本語のトイウ補語節とタイ語の *thîi* 補語節は de re 領域の内容も de dicto 領域の内容も表すことができる。

日本語では「de dicto 領域の内容（内容補充修飾）であれば必ずトイウ補語節を使い、裸の補語節は使えない」という使用条件があり、タイ語では「de re 領域の内容（内容補充/逆補充修飾）であれば必ず *thîi* 補語節を使い、*wāa* 補語節は使えない」という使用条件がある。このように、どちらの使用条件にも認識モダリティの対立概念「de re 領域」対「de dicto 領域」が関わっている。言い換えれ

ば、日本語の裸の補語節とトイウ補語節の間にも、タイ語の *thii* 補語節と *waa* 補語節の間にも、認識モダリティという意味論レベルでの役割分担が存在する。

しかしさらに重要な点は、日タイの名詞補語節の各種形式は語用論レベルでも役割分担をしており、日タイで顕著に異なるのはその語用論レベルの役割分担が生じる領域である、という点である。日本語では *de re* 領域において語用論レベルの役割分担が生じる。裸の補語節とトイウ補語節のどちらも *de re* 領域の内容補充修飾と逆補充修飾に使われ、トイウ補語節のほうが語用論的に有標であるように感じられる。一方、タイ語では *de dicto* 領域において語用論レベルの役割分担が生じる。*thii* 補語節と *waa* 補語節のどちらも *de dicto* 領域の内容補充修飾に使われ、語用論的に何らかの違いがあるように感じられる。どのように有標であるのか、どのように違うのか、その有標性や差異を具体的に特定し、語用論レベルでの役割分担の全体像を把握するためには、さらに調査を深める必要がある。現時点では残念ながらまだ完全に把握できていない。

英語の名詞補語節に比べると日本語とタイ語の名詞補語節は異なる形式同士の使い分けの基準がはっきりしていないように見える。英語では名詞補語節標識自体が補語節の内容について *de re* 領域か *de dicto* 領域かを明示するため、それらの標識の使い分けは認識モダリティという意味論レベルで明瞭に規定できるのに対し、日本語とタイ語ではそう簡単にはいかない。日本語では *de re* 領域において、そしてタイ語では *de dicto* 領域において、語用論的な使い分けが関与しており、*de re* 領域と *de dicto* 領域という分析概念だけに頼ってその使い分けの基準を明示化することができないのである。さらには日タイの間にも捉え難い複雑な相違が存在する。語用論レベルの使い分けがどの認識モダリティの領域で生じるのかが異なっているのに加え、語用論レベルの使い分けの基準自体も恐らく異なっていることであろう。そうしたことが日タイの名詞補語節体系の具体的な差異の同定を難しくしている。

4. おわりに

本稿では日タイの発話動詞起源の名詞補語節標識—トイウと *wâa*—の使われ方を比較するため、「[補語節, トイウ]理由」と「*hèet phôn* [*wâa*, 補語節]」という連語形式をコーパスから収集して分析データとし、英語の名詞補語節標識に関する先行研究も参考にしながら考察を行った。日タイの大まかな名詞補語節体系の異同を示すことはできたが、*de re* 領域における日本語名詞補語節の語用論的な使用条件と *de dicto* 領域におけるタイ語名詞補語節の語用論的な使用条件については考察に至らなかった。日タイの名詞補語節の語用論的な使用条件の異同も探るべきだが、それは本稿の考察範囲を超える。その追求は別の機会に譲りたい。

付記

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の研究成果の一部である。2 回の研究発表会で聴衆の方々から貴重なコメントやアドバイスを受け、草稿を読んだ 2 名の匿名査読者の方々からは有益な示唆を多数いただいた。また堀江薫氏、上田広美氏、アッカラチャイ・モンコンチャイ氏、陳鴻氏、宮地朝子氏からは関連する文献や情報の提供を受けた。ここに記して感謝申し上げる。本稿の不備や誤りは全て筆者に責任がある。

略号

(Leipzig Glossing Rules に含まれないもの)

CONT: continuous

PRON: pronoun

PRT: final particle

REAL: realization

注

1 本稿では Givón (1990: 509) および Kullavanijaya (2008: 448) の用語「noun complement」を借りて、その標識を「noun complementizer」

的効果を与える内容、直接引用の性質（コメント要素）を持つ内容のいずれかを表すことを挙げる。益岡（1997）はトイウ補語節について、Maynard（1992）や Takahashi（1997）と同様、情報の中心は被修飾名詞ではなく補語節にあると考える。被修飾名詞は構造的には主要素であっても意味的にはむしろ副次的な要素として機能するという。日本語記述文法研究会（2008）は伝聞的な解釈をもたないトイウ補語節について以下のように説明する。意志や疑問、聞き手の認識や不特定の主体の持つ認識、希望、話し手による比喻などを引用する場合や被修飾名詞の特性を述べる場合にトイウが介在する。大島（2010）は言語によって表現する（言い表す）過程を経た要素を導くことがトイウの基本的機能だと考える。言語による表現行為を経ていることが含意される補語節にはトイウが必ず介在し、トイウの介在が任意となる構造でトイウが介在するのは当該の事態を補語節の形で表現してみるとどうなるかを話し手が意識しているときであるという。

5 タイ語用例に含まれる機能語に添えた英語グロスの略語一覧は以下の通りである。COMP = complementizer, CONT = continuous, COP = copula, IRR = irrealis, IRR.COMP = irrealis complementizer, NEG = negative, NEG.REAL = negative realization, PASS = passive, PFV = perfective, PRON = pronoun, PRT = final particle, REAL = realization, RECP = reciprocal, REL = relativizer.

6 名詞補語節標識 *wáa* は複合形 *thîi wáa* が縮約されたものであると推測されるが、通時的言語資料を使って調査しなければその真偽を確かめることができない。

7 発話、思考/気持ち、論理、出来事、知覚の各意味タイプを代表する合計 11 の名詞を選び、個々の名詞について「名詞 + *thîi*」と「名詞 + *wáa*」という連語形式の用例を収集した。TNC コーパスの検索機能を使い、各名詞について「左隣 0 語、右隣 2 語目までに *thîi* あるいは *wáa*」という条件で検索し、それぞれの形式で最大 100 用例を無作為に抽出し、そこから「名詞 + {*thîi* / *thîi wáa* / *wáa*} + 節 [節 = (主語 +) 述語]」形式の用例を手作業で拾い集めた。関係節は除き、名詞補語節だけを選んだ。

8 寺村 (1992: 292–293) は「理由」を観念的な相対性の名詞に分類し、「理由」はその相対性による修飾 (逆補充、相対概念の補充) しかできない、つまり内容補充修飾の「～トイウ理由」という形はない、と考えている。一方、日本語記述文法研究会 (2008: 71) は「理由」を事柄名詞の事象タイプに分類し、内容補充修飾が可能だとする (e.g. [母親が突然倒れたトイウ]理由で、鈴木は会社を欠勤した)。

9 (a)不定形タイプには *naj kaan thîi* ~ ‘～することにおける’ という前置詞句も使われる (e.g. *khwaam sãamâat naj kaan thîi khiaw màak faràŋ léʔ phùuk chûak rɔɔŋ tháaw phróom kan* (ガムを噛んで同時に靴ひもを結ぶことにおける能力))。

10 認識モダリティの 1 下位分類「*de dicto*」に関する説明 (原文) は以下の通りである。The term *de dicto* refers to a semantic domain in which reference is made to the elements of speech rather than to the elements of reality (Frajzyngier and Jasperson 1991: 135) ; A clause is in the domain *de dicto* only when it is presented to the hearer as such, i.e., not as a direct description of an event but rather as a fragment of speech, or a fragment of linguistic representation which may contain a description of an event (Frajzyngier and Jasperson 1991: 136); The potential composition of the embedded clause modality marker, whether clause-internal or -external (these are usually referred to as ‘complementizer’), is [...] as follows: (1) *De dicto/de re* - (2) epistemic [which indicates any epistemic distinction other than the *de dicto/de re*] - (3) deontic (Frajzyngier 1995: 481)。「*de re*」と「*de dicto*」の区別に関して、Frajzyngier (1991: 219) は Traugott (1980: 47) による同様の区別 (‘the world being talked about’ [= *de re*] and ‘the speaker’s organization of that world in the act of speaking’ [= *de dicto*]) を紹介し、Frajzyngier and Jasperson (1991: 136) は Vendler (1967) による同様の区別 (‘propositions’ [= *de dicto*] as opposed to ‘events’ [= *de re*]) を紹介している。

例文出典

『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ コーパス) 一少納言』
国立国語研究所 <<http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/>> 2018 年 9 月 4
日 検 索 .

『タイ・ナショナルコーパス Thai National Corpus (TNC コーパス)』
<<http://www.arts.chula.ac.th/~ling/tnc3/>> 2018 年 4 月 25 日 検 索 .

参考文献

Frajzyngier, Zygmunt. (1991) *De dicto* Domain in Language. In Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine. (eds.) *Approaches to Grammaticalization, Volume 1*, pp. 219–251. Amsterdam: John Benjamins.

Frajzyngier, Zygmunt (1995) A Functional Theory of Complementizers. In Joan Bybee and Suzanne Fleischman (eds.) *Modality in Grammar and Discourse*, pp. 473–502. Amsterdam: John Benjamins.

Frajzyngier, Zygmunt and Robert Jasperson (1991) *That* Clauses and Other Complements. *Lingua* 83: pp. 133–153.

Givón, Talmy (1990) Syntax: A functional-typological introduction, Volume 2. Amsterdam: John Benjamins.

Kullavanijaya, Pranee (2008) A Historical Study of /*thîi*/ in Thai. In Anthony V. N. Diller, Jerry Edmondson, and Yong Xian Luo (eds.) *The Tai-Kadai Languages*, Chapter 16, pp. 445–467. London: Routledge.

益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2: 複文』くろしお出版

益岡隆志 (2002) 「複文各論」野田尚志・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則編『日本語の文法 4: 複文と談話』第 2 章, pp. 65–116. 岩波書店

Matisoff, James A (1991) Areal and Universal Dimensions of Grammaticalization in Lahu. In Elizabeth C. Traugott and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization, Volume 2: Focus on types of grammatical markers*, pp. 383–453. Amsterdam: John Benjamins.

パルデシ, プラシャント&堀江薫 (編) 2020. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 第 15 章, 279–299. ひつじ書房.
Pardeshi, Prashant and Kaoru Horie (eds.) 2020. *Noun-Modifying Expressions in Japanese and Languages of the World*, Chapter 15, 279–299. Tokyo: Hituzi.

松本善子 (2014) 「日本語の名詞修飾節構文：他言語との対照を含めて」 益岡隆志・大島資生・橋本修・堀江薫・前田直子・松山岳彦編『日本語複文構文の研究』 pp. 559–590. ひつじ書房

Matsumoto, Yoshiko and Bernard Comrie (2018) Clausal Noun-Modifying Constructions. In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, Chapter 13, pp. 411–432. Berlin: Mouton de Gruyter.

Maynard, Senko K. (1992) Where Textual Voices Proliferate: The to yuu clause-noun combination in Japanese. *Poetics* 21(3): pp. 169–189.

日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法 6, 第 11 部：複文』 くろしお出版

Noonan, Michael (2007) Complementation. In Timothy Shopen (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Second edition, Volume 2: Complex constructions*, Chapter 2, pp. 52–150. Cambridge: Cambridge University Press.

大島資生 (2010) 『日本語連体修飾節構造の研究』 ひつじ書房

Prasithratsint, Amara (2009) Complementizers and Verb Classification in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 2: pp. 145–160.

Ransom, Evelyn N (1986) *Complementation: Its meanings and forms*. Amsterdam: John Benjamins.

Shibatani, Masayoshi (2018) Nominalization in Crosslinguistic Perspective. In Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, Chapter 12, pp. 345–410. Berlin: Mouton de Gruyter.

Sornhiran, Rasinee (1978) *A Transformational Study of Relative Clauses in Thai*. Ph.D. dissertation, University of Texas at Austin.

高橋清子 (2011) 「タイ語の関係節構文」 長谷川信子編『70 年代生成文法再認識：日本語研究の地平』 第 10 章, pp. 253–275. 開拓社

高橋清子 (2019) 「タイ語の名詞補語節標識 *waa* の用例分析：TNC コーパスを使った予備調査」 『神田外語大学紀要』 31: pp.

パルデシ, プラシャント&堀江薫 (編) 2020. 『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』 第 15 章, 279–299. ひつじ書房.
Pardeshi, Prashant and Kaoru Horie (eds.) 2020. *Noun-Modifying Expressions in Japanese and Languages of the World*, Chapter 15, 279–299. Tokyo: Hituzi.

355–376.

Takahashi, Shino (1997) Use and Functions of Optional [TO IU] in Japanese Clausal Noun Modification. M.A. thesis, University of British Columbia.

寺村秀夫 (1992) 『寺村秀夫論文集I: 日本語文法編』 くろしお出版

Traugott, Elizabeth Closs (1980) Meaning-Change in the Development of Grammatical Markers. *Language Sciences* 2(1): pp. 44–61.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics and Philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Yaowapat, Natchanan (2008) *Phátthanaakaan khǎw pháhùnâathîi khǎw kham wâa “súη” naj phaasăa thaj* [The Development of the Multiple Functions of /sîη/ in Thai]. Ph.D. dissertation, Chulalongkorn University.